

ONE LOVE 通信 42号

2010年6月5日発行

久しぶりの日本。ガテラと一緒に帰ってきたものの、巡回診療にて大量の義足製作をするべしとのブルンジ政府からの依頼。残してきたスタッフだけでは心もとない…と言うことで、急きょガテラが戻ることに。つかの間の日本滞在。

ああ、今回もまた温泉に行けなかった。まあ、それも仕方がない。働かざる者食うべからずである。日本の皆さん、今回もどうもありがとう。滞在を無事に終えることができました。また会いましょう。



【慌ただしい日々】

2月下旬、ガテラと二人で日本に戻ってきた。約3カ月の滞在予定である。

本来ならば、日本に来る前にスケジュールを組めば、時間のロスも少ないというもの。しかしルワンダ・ブルンジでは日々のスケジュールをこなすのに精一杯だったため、結局日本に着いてから、あちこちに連絡。

やっと動き回る場所の目処がついた頃、現地に残るエマーブルに連絡を取ると…。

な、なんと。ブルンジ政府から100本以上の義足製作の依頼が！ブルンジ政府からは、この2年間資金援助も受けており、去年から巡回診療もスタートした。今回の依頼は、去年同様巡回診療で各県を回り、義足を作ってほしいという内容。

短期間で、しかも大量の義肢製作のため、ブルンジに残ったスタッフだけでは、恐らくコントロール不可能…と判断したガテラは、急きょ航空券を手配し、アフリカへ戻ったのであります。

前は巡回診療に同行できなかったガテラであるが、今回はほぼすべての県を、スタッフと一緒に回った。一言で言うと簡単だが、これはかなり疲労します。去年の7月、転んで肩を痛めたガテラは、車のハンドルを握るのもしんどい。しかし経費を節約するためには、自分で動かなくては行けない。どうやら肩の痛みが悪化したようである。

ルワンダでもそうだったが、巡回診療にはあらゆる問題を訴えに障害者がやってくる。純粋に義足や杖だけを求める人たちであれば、それほど混乱は起きないが、そうじゃない人のほうが多い。すなわち、仕事を世話してくれ、腰が痛くてたまらん、年寄りだと思って嫁が意地悪をする…などのよろず相談、世の中の愚痴は国境などないのだ。

一つの県に対して、平均9人の義足作り。それが全部で12県。配る杖はそれ以上である。しかしみんな張り切って、順調に義足の型取り修了。今回の巡回診療には、エマーブル・パトリック、そして日本で研修を終えたばかりのガテラが活躍。それぞれ担当する県を持たされ、その人たちの義足は責任を持って仕上げていくのである。今までは一本



の義足を複数のスタッフで作っていたため、責任の所在が曖昧で、適合しないところがあるとすぐに人のせいにしてた。しかしこれからはそれが許されなくなるのだ。



いやはや、巡回診療
にたくさん集まった
障害者たち

型取りを終えると、その型を持ってルワンダへ。相変わらず十分な資機材がないため、二つの国を行き来している。ルワンダでは他のスタッフが材料をそろえてスタンバイ。ディアネもその一人である。彼女は倉庫管理も任されているため、人一倍忙しい。無駄に材料を使ったりしたら、また私の大目玉を食らうのである。最近では彼女より先にトレーニングを終えた義肢装具士たちに負けていない。この頃は穏やかに時間の流れているルワンダの義肢製作所であるが、今はバタバタ慌ただしいことこの上ない。彼らはそこで義足をほぼ仕上げ、またブルンジに戻るのである。

今頃は配布の真っ最中。とにかくひと勝負。腕の見せ所なのだ。基本的に仮合わせと配布は、障害者に義肢製作所まで来てもらって行く。さらに手直しが必要な時、巡回先だと、十分に直しきれないからである。



のどこに見える、野外
での型取り
でも本当はハトハト
...

正直、これも結構大変。つまり出てきた障害者の寝泊り、食事準備しなければいけないからだ。

ルワンダとブルンジで活動するようになって、なんでもこなすことのできる体力と、フットワークの軽さがないとやっていけないことを痛感した。

最近義足を作るのはスタッフが中心になって進められるようになってきたが、雑務は相変わらず私たちの役目だ。きっとガテラは、大量にやってくる障害者のために、豆やら米やら買いこむのであろう。しかも米袋は50キロの重さ。そんなのを担いだりしていたら、腰がやられてしまう。ダイエットなんてもってのほかだ！時代は確実に肉体派なのである！

でもこの巡回診療が終われば、ほっと一息。

今年の後半は、自分たちのペースで淡々と仕事をしていくことができそうである。

最近ルワンダでの義足製作が少し落ち着いてきて、その分ブルンジがフル回転。それもこれも今までブルンジに

は義肢製作所がなかったからだ。

実はガテラは日本での研修後1カ月の休暇を約束されていた。しかしこんなことになってしまったため、休暇は返上。休む間もなく、稼働中である。

巡回診療が無事に終わったら、みんなで打ち上げやろうね！きっとその時飲むビールはうまいだろうなあ。

…とその言葉でみんなを釣って、今日も馬車馬並みに働き続けるルワンダ・ブルンジのスタッフであった。嗚呼…。

【それでは一方日本は…】

海の向こうでみんなそんなに必死になって働いているのであれば、私もサボるわけにはいかない。

ワンラブの広報と支援を得るためにあちこち動き回った。

もう10年以上も支援を続けてくれている京都のS小学校。ガテラはここに来ることを楽しみにしていた。しかしこの数年、訪れることができなかった。だから今年は必ず！と思っていたら、ああ、今年もどんでん返しだ。

この学校の生徒たちはとても優しく、思いやりがある。自分たちで育てた野菜を父兄の皆さんに売って、活動資金を集めてくれたり、声をからして募金をしている。

3~6年生にはスライドを使ってワンラブのお話、1・2年生は難しい話をして理解できないかもしれないので、ルワンダO×クイズ。



O×クイズをする
子供たち
元気いっぱいなの
である

訪れるたびに、みんなが歌を歌ってくれる。しかし、私はこれにめっぽう弱い。すなわち歌声が優しすぎるのである。だから聞かたびに、励まされた気持ちになって泣けてくるのだ。今年は絶対泣くもんかと思っていたにもかかわらず、ああ、こらえきれない涙。小学生の前で泣くなんて恥ずかしいぞ…と思いつつ。しかし泣いてすっかり。鼻を赤くして退場する私。

今年はこの小学校と同系列の中高にも行くことができた。小学校の時に一生懸命支援してくれていた女の子が、中学になっても支援を続けてくれている。周りに共感してくれる人がいなかったにもかかわらず、一人でがんばってくれていた。ありがとう。

いくつかの大学にもお邪魔した。大学で話をして感じるのは、質問をしたり興味を持ってくれるのは、ほとんど女子学生だということ。実際にルワンダに来るのも女性。これは最近どこでも同じ傾向である。しっかりしろ。男子諸君。何を恐れているのだ。もっと世界に関心を持ちましょう。

しかし意外とがんばっているのは中年男性。今回もあちこちで中年男性が、大学に招いてくれたり、報告会や講演会をアレンジしてくれた。中年男性が「オヤジ」などと呼ばれ、ないがしろにされている昨今であるが、決してそんなことないぞ。いろんなことに関心を持つ、その度合いは今の若い男子学生の比ではない。そして魅力的な中年男性の周りには、これまた同じように魅力的な中年男性が集まっている。がんばれ中年男性。中傷に負けるな。

それが証拠に中年男性が動き回ってくれた福井での講演会は、実に充実した時間を過ごすことができました。講演会にはたくさんの方が来て、耳を傾けてくれた。

初めて訪れるところは緊張する。人は集まるだろうか、関心を持ってくれるだろうか…。この活動を始めてから、人の前で話す機会も増えたけれど、やはり話す前はドキドキする。

講演会で一人のお母さんが質問をした。「自分の息子が、もし海外に行きたいと言ったら、どう答えたらよいか？」私の父も、きっとそんなことを葛藤したのだと思う。遠く離れたところに行ってしまった私を、心配したことだろう。でも、お母さん。私は思います。お母さんは息子さんが出ていくのを見守るしかないのではないのでしょうか？お母さんに反対されて、その意志を曲げてしまう息子さんだったら、ちょっと寂しい。お母さんはつらいかもしれないけれど、息子さんはその気持ちを理解しながら、がんばろうと思うはず。私もあの時黙って出て行かせてくれた父の気持ちに感謝し、今だから父の寂しさが心にしみみます。

それから今回は教会と言う場所を借りて、報告会を数回行った。私は家が仏教で、キリスト教徒と言うわけではない。しかも仏教とは言っても、信心しているわけではなく、苦しい時に手を合わせるという不真面目さである。

だがこの活動を始めてから思ったのは、信じるものがあるということは、非常に強いということである。それはうらやましくもある。

ルワンダの人たちに、無信仰だということを伝えると、そんなことは信じられないとびっくりする。さらに驚くのは八百万の神である。神は一つだと言い切る。でも自然を感じるたびに、水にも、山にも神がいると思う私。あるいはそれは神ではなく、単に「聖なる存在」なのかしらん？

ルワンダの虐殺は、教会の中でも起こったということ話を話すと、信者さんたちは非常に驚く。それこそ信じられないのであろう。神のいる神聖な場所で、血が流された。彼らにとっては許しがたい神への冒瀆。

でも人々の心は狂ってしまった。

人間は弱い生き物である。信じているつもりでも、死ぬか生きるかの瀬戸際に立った時は、その信仰をも狂わせてしまう。

だから私は教会で話をする時に、ルワンダの虐殺は教会の中でも起こったということ伝える。意地悪をしているわけではない。ただ人の弱さを伝え、強くなりたい自分を表現したいのである。

今回の滞在も、いろいろな人に出会うことができた。ワソラブの活動をしていて、何が一番うれしいかと言うと、たくさんの人に出会えることだ。人と知り合うということは、自分の知識を増やしてくれる。全く違う仕事をしている人たちから話を聞くのは、楽しくてわくわくする。

残念ながら、今年はガテラとみんなに会うことができなかったけれど、来年はきっと一緒に会いに来ます。

さあ、日本での予定を終え、ルワンダへ向かおうか。お世話になった皆さま、どうもありがとうございました。そしてこれからもどうぞよろしくお願いいたします。



ルワンダ事務所代表ガテラより

【生きているということ】

人は誰も、生まれた時から借金を負っている。そしてその借金を負ったまま、死んでしまうということもない。

生まれたばかりの赤ん坊に、借金などあるはずがないじゃないかと人は言う。

でもあるのである。

人は必ず死ぬときに、その借金を返す。

ルワンダの虐殺が始まる数年前に私は生まれた。とても大きな赤ん坊だったそうだ。ベルギーの植民地政策によってもたらされた間違った教育のため、ルワンダの人々は憎しみ合うようになった。武器を手に取り、殺し合う人たち。

流された血は大地を赤く染めた。

ルワンダにいた人たちならばすべて、自分の目で見てきた光景だ。

これは一体どういうことなのだろうか？

その血を飲まれた大地は、喜んでいるのだろうか？

この世にあるものは、すべて土と水から生まれる。

私たちが口にする食べ物や湯きをいやすための水、富の源である地下資源。

それらはすべて、私たちの生きる地球から得られている。どんなに技術が発達し、生活が便利になろうと、地球がなければ私たちは生まれてくることがなかった。

大地の力を借りながら生きている私たちは、死んで大地に戻ることにより、その借金を返すのである。

しかし問題は、その大地への返り方である。

殺し殺され大地に戻っても、地球は喜ぶはずがない。

何億何兆と言う命が生まれ、そして消えていった。

生命は大地の肥し、そしてその一部である自分。

どうせ借金を返すのであれば、地球が喜ぶ方法で、その借金を返したい。

手を取り合おう、戦うことなく。

そうすれば私たちの命から成り立っている地球は、もっともっと長生きできるはず。

それが私たちをこの世に送り出してくれた地球への、最大の感謝であると信じてやまない。

【ルワンダとブルンジ徒然に…】

ブルンジで活動を始めて、早3年目。ルワンダとブルンジ、行ったり来たりを繰り返しながら、だんだんと見えてくる、その違い。

文化・言葉・歴史、これらは兄弟国と言われるだけあって、良く似通っている。

言葉は多少イントネーションや単語が違っているが、ほぼ同じである。昔ブルンジで生活していたことがあるガテラは、ブルンジに着くと発音がブルンジなまりになっているのが、なんだかおかしい。

嬉しいことにブルンジではスワヒリ語が結構使える。ルワンダではスワヒリ語の普及率が今一つで、それ故、私には不便な点もあった。しかしブルンジではかなりの人が使っているので、言葉に関してはルワンダよりブルンジのほうがストレスがたまらない。

国の雰囲気。国境を越えただけで、国の違いが目につく。ルワンダは小ざっぱり、ブルンジは混沌と言った感じだろうか。ルワンダはたくさんのことが整理整頓されている。町の中も整然としている。

例えば、両国とも「奉仕の日」があって、ルワンダでは毎月最終土曜日、ブルンジでは毎週土曜日である。その日は国民が町をきれいにする。ゴミ拾い、ドブ掃除、草花の手入れなど。ルワンダ国民は比較的、この日を真摯にとらえ真面目に掃除をしている。政府関係者もこの日はゴム長を履き、ゴミ拾いだ。しかし！ブルンジではその時間帯、町に人影がほとんどない！すなわち皆さん、外に出ると掃除をさせられるので、家から出ないで、ここぞとばかり寝坊しているのである！



ほんとに誰もいない
のです…

う～ん、この違いは大きいですぞ。そんなせいかルワンダではゴミが目立たず、非常にクリーンなイメージがあるのだ。それともブルンジでは頻りに奉仕の日がありすぎ、国民はほとほと疲れてしまったのだろうか？

ちなみに私はと言うと、その日はワンラブの敷地から出ず、ひたすら猫と戯れるか、何となく家の片づけをしています。

食生活。基本的には似通っているけれど、タンガニーカ湖が近いので、ブルンジではレストランのメニューもお魚がたくさんある。サンガラとかムケケとか、なんだか面白い名前の魚である。

でも私が一番好きなのは、ダガーと呼ばれる淡水に住むイワシのような魚。漁は月の満ち欠けによって行われる。これは生と乾燥したものを売っているが、断然美味しいのは生である。もちろん生で食べるわけではない。相変わら

ずトマトベースのソースを使って調理するのである。警備のおじいちゃんに作り方を教わるのだが、何べんやってもおじいちゃんのような味がでない。これはこの料理に限らず、どの料理を教わっても、現地の人が作るような味にならない。

多分彼らはじっくり時間をかけて作るから、美味しいのだろう。それに比べ、私はいつも焦って作るから、ちっとも美味しくない。料理はやはりゆとりと愛がなければ極めることができないのである。

ルワンダで美味しいのは、アボガド。これは悪名高き前々大統領がルワンダ中に植えたらしく、あちこちでなっている。時々街道沿いで、子供たちが採ったアボガドを車に轆かせて遊んでいる。馬鹿もの！車がスリップしたらどうするのだ！…とそのくらいねっとりして美味しいのだ。

以前も書いたが、うちの猫はアボガドを食す。しかも激しい取り合いののち、うにゃうにゃ喜んで食べる。通常はレストランの残飯とか、ダガーと米の炊き込みなどと言うパンチ不足の食事だが、アボガドを食べればカロリーも取れるというもの。このアボガド、道端で非常に安く売っている。バケツ一杯120円。日本で馬鹿らしくてアボガドが買えなくなるわけだ。



栄養たっぷり
濃厚アボガド、
猫まっしぐら！

気候はルワンダは最高だ。朝晩冷え込むこともあるが、暑くもなく寒くもなく、年中Tシャツの活躍だ。しかしマウンテンゴリラの住む山はそうはいかない。

その日、私はテレビの取材のお手伝いをしていた。クルーと一緒に、マウンテンゴリラの保護に一生を捧げたダイアン・フォッシー博士のお墓に行くのである。しかし登るにつれだんだん天候が怪しくなってきた。辺りは濃い霧が出てきて、一寸先も見えない。気温がぐっと下がり、降ってきたのは雷である。簡単な雨具しか持ってきていなかった私は、危うく凍死（オーバーな表現です）しそうになった。

ブルンジは暑い。日本の夏のような感じである。湖があるからだ。ルワンダを出て、ブルンジへ向かうときは、途中で洋服を脱げるようにしておく。帰りはその逆。

だからブルンジの人たちは、湖のほとりにあるバーで、仕事帰りに一杯やっている。しかしこの辺は、野生のカバも出現するため、要注意なのだ。水から上がったばかりのカバは又ら又らして、う～ん、なんだかこんな体型のアフリカ人っているよな～と思ってしまう。

…とそんなこんなルワンダとブルンジ。国境をまたぐだけで、いろいろな変化が見られるというのは面白い。

そんな変化を感じるために、皆さんもぜひお越しあれ！

紹介します！ワンラブのスタッフ

【ガテテ、研修お疲れさん！】

3月に5人目の研修員であるガテテが、その研修を終え、ルワンダに戻りました。

研修期間中は日本を知るために、何度か観光地も訪れたらしい。日本と言えば温泉。最も日本的な体験をしてみらおうと、当然温泉も旅程に組み込まれる。

しかし…。ガテテは最後まで温泉につかることを頑なに拒んだ。みんなが温泉に入っても、ロビーで一人待っている。楽しんでいるみんなにしてみれば、こんなうっとおしい奴はいないのである。場の雰囲気壊すとは、まさにこのことだ。そこで日本に戻っていたガテテの出番である。ガテテは大の温泉好き。必死にガテテを説得する。恥ずかしかったらタオルを巻けば良いのだ、場合によってはTシャツを着て入っても良い…など（しかしTシャツは普通ダメだと思うのだが…）。

最後の旅行では、そんなガテテの言葉を信じて、温泉に入った。そして「ああ、極楽…」だったそうだ。だから抵抗せずに、さっさと入っていればよかったのに…。

さて研修を終える前に、ちょっと親方の所へ様子を見に行く。区画整理のため仮の義肢製作所で作業を続ける親方とガテテ。親方は相変わらず元気そうである。しかし、ドキドキ、いつも気になるのは、親方の評価である。さて…。悪くはないようである。ばんざ〜い！今回もたくさんのことを教えてもらった。さすが親方である。

なんだかかわいらしいエプロンをつけたガテテは、久しぶりに会ったガテテと何やら今後の作戦を練っている。

研修員はみんなそうだった。自分が作った義足を見せびらかしたり、学んできたことを自慢げに話してくれる。そしてルワンダに戻ったらあんなことやってみたい、こんなことやってみたいと瞳を輝かせながら語るのだ。

神奈川県庁での修了式。ガテテはスーツ姿でちょっと緊張気味。今年は例年より2人少ない6人の研修員である。中にはとても流暢に日本語を話せる研修員もいる。ディアネの時は、研修員全員が女性だった。女性恐怖症（？）のガテテがそんなところに放り込まれたら、途中で挫折してしまっていたかもしれない。

神奈川県知事から修了証書をもらうその時。ああ、私は馬鹿である。カメラの充電を忘れてしまった。せっかくの晴れ舞台、撮れたのは修了証書をもらった後の、なんてことない写真である。ごめん、ガテテ。



修了証書を受け取り
ガテテに誇らしげに見せるガテテ

そして日を改めて、研修員たちのサヨナラパーティ。研修員がお世話になった人たちや、友だちを呼んで自国の料理を振る舞う。ルワンダで料理をしたことがないというガテテも、この日は一生懸命ルワンダ料理（もどき？）を作ったが、なかなかおいしかったのであります。

私が感動したのは、研修員たちが生活をしていて、さまざまなお世話をしてくれたMさん。彼女は4回もルワンダに来たことがあり、ワンラブの仕事も手伝ってくれました。縁あって、この研修センターで仕事を得た彼女が、研修員を受け入れるため、あるいは快適に日本で滞在できるように動き回り流した汗は半端ではなかったはず。時には徹夜もしながら、一生懸命世話をしていた。パーティで彼女にマイクが渡った時、そんな大変な思いが一気に蘇ってきたのか、ぐっと涙がこみ上げてきて、言葉が続けられない。うん、その涙は流してもいいと思うよ。それだけのことをしてくれたのだから。そしてそれを見た私ももらい泣き。

しかし義足作りはさておいて、ガテテは日本語が上達しなかった。パーティでも一生懸命日本語で挨拶をしようとしているのだが（ルワンダ語の原稿を、ガテテと私で日本語に訳した）、意味がよくわからない。参加した人は、それでも優しい。わかりたいけど、わからない。そんなもどかしい謎の日本語を話すガテテに盛大な拍手！



日本の皆さん、ありがとう
ルワンダに戻っても
がんばります

そして羽田へお見送り。長旅を経てルワンダに到着するのは夜中の2時。道中、何度も飛行機の乗り換えがあるため、迷ったら大変！と言うわけで、航空会社の車いすサービスをちゃっかり利用。



この後大量の
仕事が続いている
とも知らずに…

ルワンダへ戻ったガテテを待っていたのは、巡回診療義足100本作戦！休んでいる暇はない！日本で勉強したことをしっかり生かすのだ！

さて今回もたくさんの人にお世話になりました。ガテテは今、ルワンダとブルンジを行き来しながら、義足を作っています。果たして彼を待ち受けていたエマーブル・パトリック・ディアネは彼のことをどんなふうに見るのでしょうか。がんばれ、ガテテ！



日本事務所より

【アフリカン・フェスタに参加します】

さて今年ワールドカップ南アフリカ大会開催時期に合わせ、アフリカン・フェスタが行われます。ワンラブもブースを構え参加しますので、皆さん、ぜひいらしてください。

日時：2010年6月12日（土）12：00～17：00

6月13日（日）11：00～17：00

場所：横浜赤レンガ倉庫イベント広場

入場料：無料

<http://www.africanfesta2010.com>

*残念ながら、私ルダシングワ真美はルワンダへ帰国のため、参加することができません。ごめんなさい。

【編集後記】

今回の日本滞在中も、どんでん返しはあったものの、無事に過ごすことができました。これもひとえに皆さまのおかげです。どうもありがとうございました。

日本にいるときはルワンダとブルンジのことが気になり、あっちにいるときは日本のことが気になりと、常に気持ちが落ち着かない状態ですが、何とかやっております。

今年の春は暖かくなったり、寒くなったり。気候の良いルワンダにいて、一年中同じような格好をしているので、着る服がなくて困りました。また事務所を引越してから、暑い時期に日本を離れてしまったため暖房器具がなく、帰国した次の日に早速ストーブを買いに行きました。

私は日本で生まれて育ったので、冬の寒さは予想ができませんが、大変だったのはガテラです。寝る時も靴下着用、トレーナーを重ね着して、もこもこになって就寝。

桜の花を楽しみにしていたのですが、今回はそれもおあずけとなってしまいました。

日本に帰ってくるたびに、浦島太郎になっている自分に気がつきます。世の中すごい勢いで技術が進み、物が出回り、既に私はそのスピードについていくことができません。それを感じるたびに、お年寄りには生き辛い世の中だろうなあと思います。駅で切符を買うことすら、ままたらない。

*「日本事務所より」の横のイラストは？と思う方もいらっしゃるかもしれませんが、亡くなった私の父です。生前、何かにつけて写真を撮ったり、ビデオを回したりしていたので、あのようなイラストになりました。父が亡くなったことにより、そのイラストをなくしてしまうことが寂しく、このまま通信に登場してもらっています。ご了承を…。

お店に行っても、品物が溢れすぎて、どれを選んで良いかわからない。だから今話題のiPadなどと言うのも、全くわかりません。

ルワンダも虐殺後、ものすごい勢いで開発が進んでいます。国が発展することは良いことだと思うのですが、スピードの速さと勢いの凄さに不安も感じます。都会だけでなく、田舎の人たちの生活が改善されること。それが本当の国の発展だと思います。

田舎の人たちは、相変わらず素朴な暮らしをしています。でも携帯電話を持っている人もたくさんいます。アンパランスなようだけど、携帯電話があれば、生活は便利になるはず。家族との連絡もずっと取りやすくなったことと思います。

ルワンダの人は2020年のプランを掲げることがよくあります。このままいけば、ルワンダは大都会になってしまふかもしれません。ちょっとそれは悲しいような気がします。でも復興を遂げたいと思うルワンダ、私たちはそれを見守るのみです。

私たちもルワンダとブルンジの障害者が少しでも楽に生活ができるように、これからもがんばります。

さて、2020年のワンラブは如何に？

乞うご期待！なのであります。

【お詫び】

ここ何号か、ワンラブ通信をカラーで発行していましたが、また白黒に戻ってしまいました。実はあれは、カラー部分を家のプリンターで、白黒の部分は印刷機を借りて印刷していた、つまりダブル印刷だったのです。それ故、印刷するのにかなり時間がかかり、また紙を補給したり、紙詰まりを直したり…と印刷にかかりっきり状態でした。

残念ながら、今回より人手不足のため、その時間をかけられず、白黒に戻ってしまいました。ごめんなさい。

また皆さまのお名前やご住所についても、充分気をつけて管理しているつもりですが、入力ミスで間違っていたり、通信が二通来るなどと言うことがございましたら、ご連絡ください。

領収書・お礼状は個人さまからいただいたご寄付については、省略させていただくこともありますので、必要な方はその旨お伝えください。

【おことわり】

*発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。

*当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意を頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはございません。

書き損じハガキ、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。

ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いています。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町12-8-202 TEL：0467-86-2072/080-6564-4448

e-mail：info@onelove-project.info(日本事務所) onelove@rwanda1.com(ルワンダ事務所)

郵便振替口座：00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信 42号 2010年6月

発行：ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>



One Love
Mulindi Japan One Love Project

